

場所は客先の打ち合わせ風景。※大手企業の大規模会議室（以前いただいたFAXのレ
イアウト3）でお願いします

ここでは請け負うシステムについてのやり取りがおこなわれていた。※少し厚めの資料
を見ながらの会議風景でお願いします

（発注もとの部門担当者が話している）

「・・・ということで、ここは業務的に重要なのですが、いかがでしょうか。業務知識
がなければ少し難しいところではありますが。」

各社の代表（半分は営業、1/4は部長クラス、のこり4/1は技術営業や、課長+技術者の
ペアといった感じ（雰囲気）でお願いします※総勢30名くらい）が集ったこの場で、遠
まわしに「どこがやってくれるのか？」というような言い回しで投げかけられた。

しかし、実際に奥が深そうなところだけに、誰もが顔を見合わせたりひそひそ話が飛び
交っていた。

「それ、うちで引き受けましょうか？幸い、チーム編成を終えたばかりで割り当てがま
だですし、いまならなんとかなると思いますよ。」

イケさんが口火を切った。

現場はざわめきを増したが、まだ話し合っている（人によっては携帯で会社に電話して
いる）状態であった。なにぶん、おいそれと請けられるような要求内容ではなかったのだ。

「では、プラネッツさん、お願いできますか？諸々の相談は後程ということで・・・。」
もちろん、諸々の相談とは“料金”と“期間”のことである。しかし、普通ならば悔
しがるそぶりを見せてもいい他社のものたちが、かえってほっとした表情を浮かべてい
ようだった。

「他になにかありますか？なければこれで終わりたいと思います。お疲れ様でした。」

（みなの声「お疲れ様でした。」（×複数）

ガタガタと立席する音が聞こえる中、イケさんは案件を獲得したことで満面の笑みを浮
かべていた。

場所は変わって簡易打ち合わせ場所（以前お送りしたパワポの『打ち合わせ卓』のイメ
ージです）。

「なんですって？！うちのチームでこれをやれ、と？！」

勢いあまって大きな声を出してしまった。声の主は三沢である。

「そんなに大きな声出さないでよ。たいしたことじゃないでしょ？」

イケさんがハンカチで汗を拭くパフォーマンスを見せながら弁明する。

「な、たいしたことないって・・・どうしてそんなことがいえるんですか！」

今度はひそひそ声で怒鳴る。※漫画だと、薄めの細い文字・・・でしょうか

「なんだより、三沢くん。前はうまく取り入ってやったじゃないか。つれないこといわ
ないですよ。」

前のこととは以前のプロジェクトだ。上層部のつまらぬおせっかいのためにボロボロになってしまったプロジェクトに対して、営業であるイケさんがユーザへ平謝りしてくれたことがあったのだ。まあ、それがどうというわけではないのだが。

「(きつめの表情でイケさんを見る)……。」「

少しの間、じっと見てから三沢は着席した。

「(ふうっ)」とため息をついて

「イケさん、たしかに営業はたいへんだと思います。思いますけど、無理なものは無理なんです。どこにそんなリソースがあるというんです？うちのチームの作業を大河内さんのところへ振ったとしても最初から説明しなければいし、だいたい、この説明だって誰がやるというんですか。」

実のところ、三沢は少し動揺を隠せなかった。まさかこのような話が転がり込んでくるとは思ひもなかったからだ。

「そうはいつでも、請けちゃったんだからなんとかしないとイケないんだよ、なんとかしてよ。」

イケさんが泣きついてくる。※といっても、“懇願している”といった感じです

三沢があごに手をやり、少しうつむき加減に考えたフリをしていると、

「頼むよお、三沢くん。きみだけが頼りなんだよ？他の人にはない、きみの力をあてにしていってらんだからあ。」

もうふにやふにやの状態である。これが営業独特の懇願態勢なのだろうか。

「(少しあきれたふうに) もうっ。わかりましたよ。その代わり、うちの分はイケさんが大河内さんのところに説明してやってくださいよっ。」

「もちろんさ！いやあ、ほんとと助かるよ。さすがは三沢くんだねっ！」

どうでもいいようなおべんちやらを言いながら、イケさんはそくさと去っていった。

「はあ……。いつも難問を持ち込むんだよね、あの人は……。」

ため息をつきながら自席に帰っていく三沢。その背中には哀愁のようなものさえ感じられる。※なで肩になる感じでしようか、「ガクッ」とうなだれた後姿をイメージしています。ちなみに、大河内は鮫島よりも2つほど上。だが、体育会系のノリがわざわざいえるのか、いまだ彼らより下の職責なのである。

〽開発風景・一週間後〽

「さて、困ったなあ……。」

頭をかきながら三沢が渋い顔をしている。受け持った内容が難しすぎて、うまくまとめきれないのだ。しかも、XPでやりたいのにユーザが時間を作ってくれない。これも三沢にとってはマイナス要因だった。

「ユーザの協力が無いとどうにも進まない。どうしたものか……。」「※人差し指と中指の間にペンをはさんだまま頭をかくイメージです

(ナレーション) 三沢はすでに“勝算なき状態”に陥っていた。

それは他でもない、「やってみればなんとかなるだろう」といった淡い期待がこの状況を招いたのである。(ナレーション、ここまで)

「(ハッとした顔で) こういうとき、どうするものだと書いてあったかな？」

三沢は本のことを思い出した。そういえば最近読んでいない。早速、帰ったら読み直してみようと思ったのであった。

定時まではそれなりに雑務をこなしておき、チャイムとともに帰路へ急いだのだった。

く自宅にてく

「なくんか、辞書みたいよね、そ・れ。」

夏美が本を指差しながらいう。※指を「そ」と「れ」に合わせたように動かす技法をお願いできますか？さらに、ベッドに寝そべっていて、両肘について手にあごを乗せているような格好で(わかりますでしょうか)

三沢はぶつぶついいながらパラパラ本をめくっていた。

「はは、たしかに。」

少し苦笑い気味に笑いながら三沢はページをめくりつつける。いや、実際にはめくっては戻りを繰り返していた。

「うくん、まさか『走为上』なんかじゃないよな・・・。」

それだけは避けたいと、心の奥底では思っているようだ。

こうしてまた夜がふけてゆく。

「上の立場というのは、まったくつまらんものなんだなあ・・・。」

少し自分を憂いながら、パタリと本を閉じた。

軽く伸びをして、ベッドに潜り込み眠りにつくのだった・・・。※もちろん、夏美はとつくに夢心地です